

お雇いオランダ人医師 総論

ボードイン人脈

石田純郎

明治維新直前より日本で燃えさかりだしたオランダ医学は、西洋医学の主流に一時はなるのではないかとさえ思えたのであるが、維新政府のドイツ医学採用決定により、水をかけられ、ほのおは消えてしまふ。

この時期（一八五七—一八九四）に日本で業務を行ったオランダ医師は十四名、薬剤師は四名の計十八名の多きにのほ。従来これらのオランダ医たちの履歴、教授内容等につき、知られている事は少なく、また彼等の日本に及ぼした影響も過少に評価されてきた傾向がある。

これらのオランダ医達の中には、一八六二年に来日し、長崎、大阪、東京で医学校の教師をつとめたボードインがいる。これらの十八名の中には、彼と学閥、血縁等で関係があった人物が多く、このボードインを中心に明治初期の蘭学が導入されて来た事が明らかとなってきた。

ボードインは、Franciscus Dominicus Andreas Bauduin の第五子として、一八二〇年六月二〇日にオランダのドルドレヒトで生まれた⁽¹⁾⁽²⁾。一八三九年一月一五日にウトレヒト大学に入学し学んだ。その間、一時的にウトレヒト陸軍軍医学校でも修業した⁽³⁾。一八四五年六月二日にはグロニンゲン大学で学位を受けた。一八四三年八月二日より三等陸軍軍医、一八四七年一〇月三〇日よりは二等陸軍軍医となった。一八四七年より、一八六二年の間にはウトレヒト陸軍軍医学校教授となつた。この頃彼が知り会った医師が、後に維新前後に大勢日本へ行く事となる。ここに在任中、彼はウトレヒト大学有力教

授ドンデルスにも教えを受け、眼科学、生理学にも精通していく。一八五一年には *Natuurkunde van der Gezonden Mensch* と題した陸軍軍医学校用生理学テキストを、ドンデルスと共著で出版している。

さてボードインの教授したウトレヒト陸軍軍医学校について少し述べる。⁽⁴⁾一八二五年、ライデン陸軍病院に軍医学校が付設され、医学全般、外科、薬科を軍医五名と産科医一名が教授した。一八一七年には Louvain にも軍医学校が設立され、一八二二年に両校が合併、移転し、ウトレヒト州立陸軍軍医学校となり、一八六五年にこれがアムステルダムに移転する迄の四四年間軍医を養成しつづけた。ウトレヒト軍医学校は一五病棟五〇〇ベッドの付属病院を持ち、有床率は約六〇%であった。入学志願者は一六歳〜二〇歳の健康な青年で、入学試験科目には、フランス語、ドイツ語、ラテン語、歴史、地理、数学、幾何があった。四年制でクリニカルスクールに比べ程度は高かった。講義は植物学、化学、解剖学、生理学、薬理学、外傷手当、内科学、外科学であった。教育目標としては、実地の出来る医師という事で、生徒は低学年より患者の診察法と治療法を習った。昇級のためには理論のみならず、実地の能力も必要とされた。ウトレヒト大学との交流が盛んであった時期もある。一八四〇年から一八六〇年にかけて、教師に手軽なオランダ語の(従来医学テキストは、ラテン語又はギリシャ語であった)、ハンドブックを書かせ、この間一八冊のテキストが出版された。これらの本が後にオランダ医達が日本で残した講義録の底本になったのであろう。

ボードインは、一八四七年より一八六二年迄こうした中で教育をほどこし、そしてここから後に日本の医学に大きな影響を与えたオランダ医たちが育っていく。表一では彼等の学歴をまとめたが、在学期間より推定して、ブッケマ、ホック、ヘーデン、マンスフェルト、ポンペ、ロイトル、スロイスはボードインの教え子と考えられるし、エルメレンス、ハラタマ、ポンペは友人、ロイトルは⁽¹⁾おい、ゲールツ、レーウエンは同じ学閥の間人である。従って、ある程度の経歴が知られているオランダ医師十二名の中では、ボードインと来日前に関係がなかった者はいない。

また十四名の医師の修業学校の分析を行ってみる。出身軍医学校の傾向であるが、ウトレヒト陸軍軍医学校卒七名(五

表1つづき(3)

職 種	ボードインとの関係	註
医 医	本人 教え子, ボードインのめいの同僚 ツワートルと結婚*	父は有名な裁判官*
薬 医 薬・化	? ボードインに勧められ来日 ?	現地資料未発見 父はグ大の有名教授 兄弟はノーベル医学賞学者*
医	教え子	
薬	同じ学閥	
医・理	ウ軍での同僚, ボードインに勧め られ来日	
医	教え子	非軍医(医師ではこの人のみ)
医 医 医	? 教え子 同じ学閥	現地資料未発見
医 医 薬	教え子 ? ?	現地資料未発見, 兄弟に脚気の成 書あり
医	教え子	
医	おい, 教え子	
医 薬	教え子 ?	現地資料未発見

*: 新知見又は従来の誤りを正した部所(全て(3)による)

表1つづき(2)

出身学校			教師として働いた学校	在日期間	勤務地
軍医学校	大学	学位			
ウ軍A*	ウ大	グ大	ウ軍	1862 ~ 1870	長崎, 大阪, 東京
ウ軍*	グ大	グ大*	?	1870 ~ 1887	大阪, 東京, 横浜, 長崎
?	?	?	?	1874 ~ ?	(司薬場) (内務省)
?	グ大	グ大*	?	1870 ~ 1877	大阪
?	(ア大*	ラ大*	グ大*	1876 ~ 1885	(衛生局) 東京
?	ウ大*				
?	ウ大	ウ大*	?	1877 ~ 1883	新潟, 長崎
?	?	ウ大*	ウ軍	1869 ~ 1883	長崎(司薬場) (内務省)
ウ軍	(グ大*	(ウ大(PhD)*	ウ軍*	1866 ~ 1870	長崎, 大阪
	ウ大*	ウ大(MD)*			
?	ウ大	ウ大	?	1874 ~ 1894	(横浜) 新潟, 東京
?	?	?	?	1875 ~ 1880	金沢, 新潟
ウ軍*	?	?	?	1866 ~ 1879*	(横浜)
?	グ大*	グ大*	?	1870 ~ 1879	長崎
?	ウ大	?	?	1866 ~ 1879	長崎, 熊本, 京都, 大阪
?	?	?	?	1866頃	(横浜)
ミクB*	(ア大*	グ大*	(グ大*	1876 ~ 1878	(司薬場)
	グ大*		ウ大*		
ウ軍	—	—	?	1857 ~ 1862	長崎
ウ軍*	—	—	?	1870 ~ 1872	岡山
ウ軍*	ラ大*	ラ大*	?	1871 ~ 1874	金沢
?	?	?	?	1874 ~ 1875	(大阪)

〔職種〕〔勤務地〕: () 内は医育機関以外での勤務

医: 医師 薬: 薬剤師

〔註〕 化: 化学者 理: 理学者

A: 一時的在籍

B: クリニカルスクールは軍医学校とは異なった医育機関であるが、便宜上軍医学校らんに記入した。

表 1 (1) 1857以後来日したオランダ人医師 (薬剤師を含む)

名 前	フルネーム	生年～没年
ボードイン ブッケマ	BAUDUIN, Antonius Franciscus BEUKEMA, Tjaico Wiebenga*	1820. 6.20*～1885. 6. 7 1838. 6.18*～1925. 6.25*
ドバルス エルメレンス	DWARS, B.J. ERMERINS, Christian Jacob*	? ~ ? 1841. 6.21 ~ 1880. 1.11*
エイクマン ホック	EIJKMAN, Johan Frederik FOCK, Cornelis Hendricus Mattheus*	1851. 1.19 ~ 1915. 7. 1* 1845. 9.21 ~ 1883. 2. 4
ゲールツ	GEERTS, Antonius Johannes Cornelis*	1843. 3.20 ~ 1883. 8.30
ハラタマ	GRATAMA, Koenraad Wolter	1831. 4.25 ~ 1888. 1.19
ヘーデン	HEYDEN, Wilhelmus Hubertus van der*	? ~ 1894
ホルテルマン ヨング	HOLTERMAN, Atrian JONG, Cornelis Gerardus de*	? ~ ? ? ~ ?
レーウエン	LEEUWEN VAN DUIVENBODE, Willem Karel Maurits*	1837. 4.13 ~ 1882.12. 2
マンسفエルト メーエル プラッハ	MANSVELT, Constant George van MEIER, A. か? PLUGGE, Pieter Cornelis	1832. 2.28 ~ 1912.10.17 ? ~ ? 1847. 4.12*～.1897*
ポンペ	POMPE VAN MEERDERVOORT, Jhr Johan Lydius Catherinus	1829. 5. 5 ~ 1908.10. 7
ロイトル	RUIJTER, Franciscus Johannes Antonius de	1841. 6. 6 ~ 1886. 2.13
スロイス ドロウルス	SLUYS, Pieter Jacob Adriaan*	1833. 8.15 ~ 1913. 2.17* ? ~ ?

[略号] ウ軍：ウトレヒト陸軍軍医学校
 ウ大：ウトレヒト大学
 グ大： Groningen 大学
 ア大：Amsterdam 大学
 ラ大：Leyden 大学
 ミク：Middelburg クリニカルスクール

〇％)、在籍の有無不明七名(五〇％)で、少なくとも半数の者がウトレヒト軍医学校に在籍した事があった。一方大学では、ウトレヒト大五名(三五・七％)、グロニンゲン大四名(二八・六％)、ライデン大一名(七・一％)、不明三名(二・四％)、在籍なし二名(一四・三％)である。学位取得校では、ウトレヒト大学三名(二・四％)グロニンゲン大学四名(二・八・六％)、ライデン大学一名(七・一％)、不明四名(二八・六％)、取得せず二名(一四・三％)で、ウトレヒト大学、グロニンゲン大学閥の者がライデン大学閥の者に比べ多い。これらにはボードインの学歴の影響も、もちろんあると思う。出身学校は、陸軍軍医学校だけの者、大学だけの者、両方の出身者と色々で、陸軍軍医学校、大学、クリニカルスクールの各々がどの様に組合わさって機能していたのか、当時の様子が私共日本人には充分理解出来ない。ライデン大学歴史学ポイケル準教授に当時の医育機関を概説する小論文をお願いしたので、この点に関しては近日中に明らかになるものも期待する。

A・F・ボードインの弟に、Albertus Johannes Baudin という人がいる。彼は少なくとも一八六二年以前に長崎へ来日し、オランダ領事として働いていた。一八六三―一八六八年にはオランダ貿易会社の代理人も兼任している。⁽⁶⁾ 彼がボンペの後任として、兄A・F・ボードインを推選したのである。従ってオランダ医学導入の本当の仕掛人は、A・J・ボードインという事になる。A・F・ボードインは一八六二年より一八六六年迄長崎養生所、後改め精得館の教師を勤めた。この間ハラタマを一八六六に母校より呼んでいる。一八六六年、七月よりしばらくの間、出島三番地にA・J・ボードイン、A・F・ボードイン、マンスフェルトが同居し、八番地にはハラタマも住んでいた。⁽⁶⁾

一八六九年よりボードインは大坂医学校に勤務、この時には弟A・J・ボードイン、もう一人の弟、Dominicus Franciscus Antonius Baudinと共に大坂の大福寺で写真をとっている。⁽⁷⁾ D・F・A・ボードインは、後にロッテルダムの銀行総裁になった人で、一八六九―七一年の二年間にわたり、ジャワ、中国、日本、アメリカを旅行している。一八七〇年三月にはA・F・ボードインは岡山藩医学館教師でおいにあたるロイトルと同居していた。

一八七〇年六月、ボードインは任期満了して後任のエルメレンスと交替した。エルメレンスは、ボードインの勧めで来日したという。一八七二年当時エルメレンスは、ブッケマ、岡山藩を辞してきたロイトルと大阪市内で近接して住んでいた。⁽⁸⁾

さて医学界及びボードインの弟以外には、ボードイン人脈の人間が少なくとも二名はいる。(表二)二人共未婚婦人で、I・C・ツワートル、及びJ・H・A・de ロイトルの二名。一八七二年にジャワのセマランより来日。同六月より七四年九月(ツワートル)、十一月(ロイトル)迄、開拓使仮学校で英語教師として働いた。当時のオランダ領事A・J・ボードインの勧めであるという。⁽⁹⁾ 開拓使と女教師との間に何かトラブルがあるたびに、A・J・ボードインは女教師側の利益の代弁者として働き、A・J・ボードインの黒田開拓長官あての書簡の中で、J・de ロイトルの事を同居しているわけでもないのに、「私の家族の一員」と表現している。⁽¹⁰⁾ 実は、彼女は、岡山藩医学館教師、F・J・A・de ロイトルのすぐ下

表 2 医師以外のボードイン関係者

名 前	フルネーム	生 年～没 年	職 業 経 歴	ボードインとの関係
ボードイン	BAUDUIN, Albertus Johannes	1829. 6. 24～1890. 7. 25	幕末、明治はじめ、在日オランダ領事(長崎、神戸、横浜)	弟、ボードインを招く
ボードイン	BAUDUIN, Dominicus Franciscus Antonius	1827. 7. 24～1909. 12. 19	1869～1871 ジャワ、中国、日本、アメリカを旅行	弟
ツワートル	TOEWATER, I.Ch.	? ～ ?	1872. 6～1874. 9 開拓使仮学校英語教師	A・Jボードインの勧めで就職 後ツウケン夫人
ロイトル	RUIJTER, Jaqueline Henrieta Angelique de*	1843. 8. 27*～ ?	1872. 6～1874. 11 開拓使仮学校英語教師	A・Jボードインの勧めで就職 ボードインのめいロイトルの妹*

*新知見(3)による

表 3 医学専門学校より
り医科大学に昇
格した年次

1877	東京*
1899	京都
1903	九州
1915	東北
1919	大阪*
1920	名古屋
1920	慶応
1921	京都府立*
1921	北海道
1922	岡山*
1922	新潟*
1922	熊本*
1923	千葉
1923	金沢*
1923	長崎*

* その前身でオランダ
医が教授した大学

図が感じられるのである。しかし日本政府は一八六九年、オランダ医学からドイツ医学への転換の方針を示し、その後のドイツ医学の普及は、歴史の示すところである。

ボードインの意図は全く無駄であったのだろうか？ いやそうではない。表三に示したが、明治初期にオランダ医達が教授した医学校は地方では屈指の医育機関となり、大正時代には医科大学となっていく。その理由としては、オランダ医を雇う事の出来た地方は、医育機関へ充分の投資が出来続けた事、明治二〇年の勅令により多くの公立医学校が整理された際、オランダ医の来た実績のある学校が意識的に残されたという事が考えられる。

実は最初はこの原稿は日本だけの資料で書いたのである。それを英訳し、友人のライデン大学ポイケル准教授に見てもらった所、親切にも氏は不明の箇所、誤った箇所を精力的に現地資料と照合してくれた。五月下旬、小生もオランダへおもむき、それを手伝い、討論を行った。その成果が表一、表二であり、これだけですでに五十ヶ所をこす新知見が含まれている。そのため急拠全面改稿を行なわざるを得なくなり、編集部に迷惑をかける事になった。今後調査が充分進んだオランダ医から、詳しく各論を、ポイケル氏及び小生の共著、あるいは単独で断続的に発表して行く予定である。なお、今回は新知見の出典の明示が間に合わなかったが、各論ではきっちりしていくつもりである。今回の論文に対し多大

の妹であり、ボードインのめいであつた⁽³⁾。またツワールは、一八七四年に開拓使仮学校に勤務していた当時、先に述べたオランダ医ブッケマと結婚して⁽⁷⁾。以上、維新前後におけるオランダ医たちの学閥、血縁、人間関係について述べてきたが、これ程多くのボードイン人脈がこの時期に来日して来たという事より、オランダ医学を日本へ植えつけようとした彼の意

な協力をいただいたボイケル氏に深謝する。

三菱水島病院小児科

文献

- (1) 石田純郎 岡山藩医学館教師ロイトルについて、日本医史学雑誌 二六、二七四、一九八〇。
- (2) 石田純郎 A・F・ボードインの生年月日についての考察。日本医史学雑誌、二八、三九一、一九八二
- (3) ライデン大学医史学教室 H・ボイケル氏発見の新資料による。一九八二、五。
- (4) Harn Benkers, *Medical Education in the Netherlands in the 19th century*, 第六回国際医史学シンポジウム 富士、一九八一。
- (5) 山脇悌二郎、長崎のオランダ商館 一九五、一九八〇、中央公論社。
- (6) 外国人並支那人名前取調帳 慶応二年、長崎県立図書館蔵。
- (7) Y.P. Kleiweg de Zwaan: *Völkerkundliches und Geschichtliches über die Heilkunde der Chinesen und Japaner* 五五八、一九一七。
- (8) *Japan Daily Herald Directory and Hong List* 二八～二九、一八七二
- (9) 札幌市、お雇い外国人。一三六、一八九、三〇六、一九八一、北海道新聞社。
- (10) 北海道大学北方資料室、秋月俊幸氏よりの私信 一九八二、二、二五。

The Dutch Doctors who worked in Japan around the Meiji Restoration (1857~1894)

Introduction : the Bauduin clan

by

Sumio Ishida

Prof. Dr. Antonius Franciscus Bauduin (1820~1885), a professor at Nagasaki Medical College, Osaka Medical College and Daigakutoko from 1862 to 1870, graduated from Utrecht University in 1843 and taught as a professor at the Training College for Army Surgeons in Utrecht from 1847 to 1862. After 1857, 18 Dutch doctors (including 5 pharmacologists) came to Japan. The personal histories of 12 doctors are well-known. They were either students or acquaintances or relations of prof. Bauduin. The purpose for which he invited them to Japan might be to encourage Dutch medicine in Japan. But the Japanese government decided to officially adopt German medicine in 1869. Dr. Bauduin left Japan in 1870. But the medical schools in which these Dutch doctors had taught developed to the first class medical colleges until 1920.